

令和6年度

学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月28日実施)	総合評価（3月5日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	自立と社会参加をめざし、小中高一貫した、系統性のある教育課程の編成と、児童・生徒の身につけたい力を明確にした授業づくりを進める。	①学部間の系統性、他学年、他学部を意識した授業計画、授業実践を行う。 ②児童・生徒が将来必要となる力を身につけられるよう授業改善に取り組む。	①校内研究とも連携し、学校教育目標を軸に、各学部で身につけたい力、学習のねらいを明確にし、学部、学年目標を意識した授業実践を行う。 ②教科ごと、また他教科等とのつながりを意識し、児童・生徒が将来必要となる身につけたい力を考えながら授業づくりを行う。	①学部、学年目標、また学部ごとの身につけたい力、学習のねらいを意識した授業実践が行えたか。 ②教科ごと、また他教科とのつながり、児童・生徒に身につけたい力を意識した授業実践、授業改善が行えたか。	①学期ごとに学びの山場を設定し、どのように力を身につけるか計画を立てた。昨年度校内研究で作成した学年別身につけたい力一覧を元にした「学びの山場関連計画」の作成や、「音楽・美術・体育の身につけたい力の一覧」を活用した単元のねらいの検討により、学習のねらいや評価基準を明確にして授業実践を行った。 ②「学びの山場関連計画」により授業間のつながりを見える化し、授業実践・検証・改善を行った。また、学校目標を基にした身につけたい力一覧を検討し将来必要となる力を共有した。公開授業研究会では、教科で身につけたい力と教科等横断的に身につけたい力を明記した資料と共に授業を公開した。学部によっては、教科を横断し共通で身につけたい力を単元計画の指導観に明記し、意識するようにしている。	①②学部ごと学習のねらいを明確にした授業実践、また他教科とのつながり、身につけたい力を意識した授業改善に取り組んだ。学部によって行っている目標に対する評価、結果的にどのような力がついたのか、客観的な評価を行うことにもフォーカスをしていく。教科の身につけたい力の一覧は、概ね系統的な配列となっており、学部間のつながりを捉える上での参考となっている。系統的教育課程に基づいた学部、学年ごとの学習というところを今後見据えていく。	学校評価全体的なこととして、目標が「達成」とあるところは次年度の方向性が明確だが、「中達成」の箇所は、次年度の改善方策が曖昧であり分析が必要。 「中達成」とした根拠を明確にすることが必要である。 系統性という考えはあるが、児童・生徒の実態、個別性もあるので、学習する内容が、それぞれの学部、学年の授業で混在している。 系統性の定義、意味するところは捉えにくいのではないか。系統性ということについて、先生方にどのくらい伝わっているのか。学部、学年で確認していくことが必要。	「音楽・美術・体育の身につけたい力の一覧」の活用により、ねらいや評価基準を明確にした授業実践、また「学びの山場関連計画」により授業間のつながりを見える化し、教科で身につけたい力と教科等横断的に身につけたい力を明確にしたことは、大きな成果である。 結果的にどのような力がついたのか、客観的な評価を行うことにもフォーカスをしていくこと、また系統性の意味するところを職員間で共通理解を図っていくことが必要である。	教科の身につけたい力一覧を参考に、学習目標、内容についで、学部間のつながりを意識できるようにしていく。また同時に学部間の系統性、生活年齢に合った学習内容についても職員間で共通理解を図っていく。 学習の結果できるようになったこと、どのような力が身についたのかを、個別教育計画やアセスメントシート等を基に客観的な根拠によって示していく。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	児童・生徒の教育的ニーズに基づき、多角的な視点からアセスメントを行い、個に応じた力の育成を図るとともに、組織的、効果的な支援を行っていく。	①多角的な視点でアセスメントができるよう、教員間で見立ての共有を図る。 ②個別教育計画、アセスメント資料を基に、児童・生徒個々のニーズに合わせた支援を行う。	①生徒の実態、身につけたい力を把握するため、校内外の専門職、相談担当、進路担当とケース会や記録の回覧等を行い見立ての共有を図る。 ②アセスメント資料、個別教育計画に基づき、校内の教材や支援グッズを整理活用し、児童・生徒個々のニーズに合わせた支援を行う。	①校内外の専門職、相談担当、進路担当とケース会や記録の回覧等を行い見立ての共有を図ることができたか。 ②アセスメント資料、個別教育計画に基づき、校内の教材や支援グッズ等を整理、活用することができたか。	①担任、相談担当、心理職と密に連絡を取り合い、校内ケース会、関係機関との拡大ケース会、関係機関の利用計画を立てることができた。ブロック内専門職巡回はO T、S T、Tそれぞれ実施した。ケース会の記録や週報を回覧し、より効果的な支援につなげている。小学部は心理職と連携しアセスメントシートの改訂を行い、中学部は新たなシートを作成中。校内やブロック内専門職の行動観察による助言を日常の指導・支援に活かすことができた。 ②実態やニーズに合わせた授づくりや教材開発を行った。	②児童・生徒の実態に合わせ、より適した教材や支援グッズを作成し、指導・支援にあたっている。今年度、学G会でデータ化の仕組みを構築した。個別課題学習教材の映像をデータ化し、新たな教材作成の参考とする予定にしている。また相談室の一角に教材置き場を設定し、職員の活用を図っていく。実践開始。今年度は学G会が担い、次年度は教育相談チームへ移管する。個別課題学習については、実態別段階別の教材開発も視野に入れていきたい。	放課後デイサービスの事業所でも個別支援計画を作っている。アセスメント、モニタリング、課題、目標設定という流れである。その過程では職員間での認識の共有が大切。アセスメントをどう共通理解し、活用していくかが大切である。 主障害に焦点化したアセスメントが必要である言語指示、視覚支援に取り組んでいるが、児童・生徒の理解に合わせた指導に重点を置くとよいだろう。	担任、校内の各担当者との連携、また関係機関との協働により、効果的な児童・生徒支援につながった。小中学部はアセスメントシートを活用し、適切な実態把握に努めている。児童・生徒の実態に合わせた教材、支援グッズについて、データや実物教材の情報共有システムが整ってきた。実効性のある活用、教材開発が課題。	今後も、担任を中心とした校内外の関係者との連携を図った児童・生徒支援を行っていくと共に、支援結果、効果についての確認、検証を行っていく。 実態把握に向け、アセスメントシートの活用、高等部版シートの作成を目指す。 教材管理、活用、開発を今後も進めていく。
3	進路指導・支援	児童生徒が地域社会で豊かに生きる力を育むために、鶴見のキャリア教育目標を踏まえ、ライフキャリア、ワークキャリア両面での系統的なキャリア教育の充実を図る。	①個別教育計画の「本人の願い」を保護者と共有し、キャリア教育の理解を進める。 ②学部に合わせてキャリア教育、進路学習教材の活用を進め、将来必要となる力の育成を	①連絡帳、授業参観、面談等で、児童・生徒の目指す姿、キャリア発達、地域で豊かに生きるために必要なことを保護者と共有する。 ②保護者と教職員に向け、各学部段階、また卒業後の生活に必要	①児童・生徒の目指す姿、キャリア発達、地域で豊かに生きるために必要なこと等について、保護者と共有することができたか。 ②保護者と教職員に向けた、各学部段階、また卒業後の生活に必要	①保護者面談では、児童・生徒、保護者の願い、個別教育計画に明記した身につけたい力等を共有し、目標の達成状況や次の段階を確認した。また、必要に応じ進路や相談担当が同席し、卒業後の地域生活を見据えた情報提供を行っている。 ②長期休業期間中には教職員や保護者対象、課業期間中には保護者対象で学部ごとの進路学習会や研修会を	①保護者のニーズは、小学部低学年は身の回りのこと、高学年は社会的ルールに関すること、中学部では調理、掃除、食事の盛り付け、時計を見ての行動等、学校での取組を家庭でも行い様子を共有できた。他に学校全体では意思伝達、一人で過ごす力、気持ちのコントロール、しゅた性、判断力、コミュニケーション力等が挙がった。引き続き個に応じた	4年間の目標の「生きる力」は職員、保護者間で共通理解がされているか。知児童・生徒にとって、わかる、できる喜びが活動の原動力である。学びの系統表に埋め込まれているのか、コアな部分であり見えにくい。わかる、できる喜びは進路につながっていく。	保護者面談では、将来を見据えた身につけたい力の共通理解を図った。視点1の身につけたい力の部分と重なり、整理が必要。 保護者対象の進路学習会を長期休業、また課業期間中も行い、情報提供に努めた。教員	今後も、少し先の未来、学校卒業後の進路を意識した力の育成、保護者との共通理解を図っていく。 進路学習会は、学校運営協議会の地域協働部会主催の学習会も行った。課業期

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月28日実施)	総合評価（3月5日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
			図る。	必要な力についての情報提供を行うとともに、進路学習教材の整理、活用を進める。	な力についての情報提供、進路学習教材の整理、活用を進めることができたか。	実施し、将来に向けての情報を共有することができた。小学部の進路チーム員が夏季施設見学研修の取りまとめ担当することで進路先の情報を得る機会とした。 達成 ②進路学習教材の活用について、高等部は実習日誌の見直しを行い、共通化を図った。中学部は縦割りの作業学習について、要項の見直しを進めた。 中達成	キャリア教育を進めていく。 ②保護者と教職員に向けた各学部段階、また卒業後の生活に必要な力についての情報提供は、今後も継続していく。進路学習教材のデータ化については、鶴見支援学校のスタンダードを作り、皆で共有できるよう、チーム主導で取り組んだ。今後もデータを整理し活用しやすいようにしていく。		対象の進路学習会も長期休業中に実施しているが、保護者と共有するためにも同じ情報提供を行っていく必要がある。 進路学習教材は、教材データの活用状況を検証しながらより良い活用を目指していく。	間中は、校内、地域の保護者対象となるため、教員も参加できるよう、実施時期を考えていく。
4	地域等との協働	児童・生徒の学びの場をより地域に広げ、また地域への情報発信を行うことで、障害のある児童・生徒の理解を進める。地域と連携した教育活動を推進し、共生社会の実現を目指していく。	①XやHPでの教育活動の発信を継続し、保護者や地域への理解を進める。 ②地域との連携、協力、校内外の交流活動を推進する。	①XやHPでの発信や、校内外での作品展示等を通じて、本校の教育活動の取組を発信する。 ②居住地交流、学校間交流、他学部交流と、様々な形での交流を行う。また、巡回相談等を通じて近隣諸学校との連携を進める。外部資源の教育的活用を展開する。	①XやHPでの発信、作品展はどのくらい行い、成果や反響はどうだったか。 ②地域の学校等と交流が行えたか。また地域の学校へのセンター的機能を発揮できたか。外部資源の教育的活用が行えたか。	①Xは年間で給食157回、学習等の記事104回発信。校内での「つるみアートギャラリー」「かわさきふれあい作品展」「トヨタ作品展」、「大倉山フェスタ」に作品の出展を通し、地域との協働、学習の取組について情報発信を行った。 達成 ②駒岡小との交流は、相手校から楽しかったとの感想が多数あり、活動や目標共有の重要性を感じた。中学部は外部団体による授業を計6回行い、貴重な体験ができた。高等部の地域マルシェへの作業製品出品、分教室の岸高祭参加、岸根公園での花壇整備、感謝デイに参加と、地域交流は継続している。 達成 地域への巡回相談により、各校助言を生かして教室の環境調整や教材の工夫などに取り組んだ。見立てを共有することで、助言後の指導結果について、再度の巡回で確認する等、地域力の定着に努めた。 達成	①Xの発信は地域からどのくらいのニーズがあり、発信による効果、反響等を確認していく。また、地域との協働についても地域からの反響、要望、学習効果等について確認をし、より良い活動につなげていく。 ②学部ごとに行っている交流活動は、今後も継続し、地域の学校や関係機関との関係をより深くしていく。今後も地域の学校支援も継続して行い、助言がどのような形で教育活動に活かされているか確認し、地域力の定着に努めていく。	地域への発信について、反響を確認していくとよい。発信内容がルーティンになっていないか。インパクト、アクセントが大切。学校教育をライブ感が出るように発信してもよいのでは。 Xの内容で、保護者間のグループラインで話題になったことがあった。発信者が知らないところで話題になっていることもあるので、発信後に聞いてみてもよいのではないか。かつて学校は地域から教材を寄付してもらい、授業で製品化していた。実現されれば、このことをXで発信してもよいのではないか。 地域の学校への助言は、どう活用されたか、アンケートを取るなどして確認してほしい。	Xやホームページでの情報提供は多く行っている。発信による効果、反響等を確認し、またどのようなニーズがあるのかを把握することも必要である。 学部間の授業交流、他の学校、地域の関係機関との交流活動は、少しずつ行われてきているので、今後も継続していく。 センター的機能を使った学校支援の活用状況確認を今後も進め、反応や実施状況を検証し、地域の教育力向上へ貢献していく。	保護者面談で希望を聞いたり、保護者アンケートを取る等し、どのような情報が欲しいのか、ニーズの把握を行い、よりタイムリーな情報提供を心掛ける。 情報発信をした効果、反響も閲覧数の確認や面談やアンケート等で様子を把握し、より良い情報提供につなげていく。 地域の学校支援については、助言したことの活用状況確認を今後も継続して行い、より良い支援につなげていく。
5	学校管理 学校運営	安全安心な学校づくりのため、良好な教育環境の整備と、危機管理体制の確立を図り、地域に信頼される学校づくりに取り組む。教員の教育力、専門性の向上、不祥事の防止を図ると共に、効率的な業務遂行と働き方改革を推進する。	①地域や近隣の学校とも情報共有と連携を図り、緊急時に備えていく。 ②様々な勤務形態がある中で無理なく行える教育の在り方を模索する。	①地域(駒岡地区)の防災訓練にチームとして参加し、校内の課題を検討する。校内の防災訓練をより実効性のあるものとする。 ②日課表や年間計画を見直し、児童・生徒にとって必要な学習活動を整理する。また働き方改革プロジェクトを中心とした業務の効率化、削減計画を進める。	①地域との情報共有をもとに本校の課題を整理することができたか。 ②日課表や年間計画の見直しを行い、児童・生徒にとって必要な学習活動を整理することができたか。また働き方改革プロジェクトを中心とした業務の効率化、削減計画を進めることができたか。	①学期ごとの避難訓練は、その都度想定を変えて実施した。シェイクアウト練習、防災食の喫食体験等、学年単位でも防災授業を行った。回を重ねるごとに児童・生徒も落ち着いて訓練に臨む様子があった。反省を次の訓練につなげていく。 達成 鶴見区役所防災担当の方と、補助的避難所の開設の流れを確認した。また令和7年2月の駒岡地区センターでの補助的避難所開設訓練に参加し、校内での実施に向け、関係者間の連携を図った。 達成 ②年間4回プロジェクト会議を行い、児童・生徒にとって必要な学習活動の整理と働きやすさの視点で様々なアイデアを出し、業務改革、削減の可能性を模索した。 中達成	①学期ごとに行う避難訓練は今後も想定を変えながら実施し、万が一のときに備えていく。大規模災害時の取組については、鶴見区と連携を始めた段階であり、本校の役割、補助的避難所としての職員の動き等を確認するとともに、地域の施設との連携も進めていく。 ②働き方改革プロジェクト会議の実施が不定期となり、計画的な業務の見直しができなかった。しかし、職員の働き方に特化した会議を行ったことは意味があった。会議を受けて実際に取り組んでいることもあり、業務を見直すきっかけにはなっている。達成目標、達成できたことを見える化し、常に意識していけるようにする。	避難訓練の積み重ねは大切である。大曲広場は防災拠点として有効活用してもよいと思う。駒岡地域の防災訓練が行われている。学校としても様子を参観させてもらっている。災害は心配であり、学校として取り組んでいただくことは大切である。防災宿泊は、1クラスでも、学校の中で一晩明かす等、遊び心をもって取り組んではどうか。 横浜市では時間割の改革を進めている。働き方を考える部会を設置してもよいのでは。	避難訓練は今後も想定を変えながら実施し、万が一のときに備えていく。また防災学習は、実効性のあるよう実施と検証を重ねてより良いものとしていく。 大規模災害時の動きについては、鶴見区と連携を始めており、本校の役割等を確認するとともに、地域の施設との連携も進めていく。 働き方改革は、できることから、教育課程、業務の見直し等を進めていく	環境管理グループ、安全チームが中心となり、学部とも連携しながら学習計画を進めていくよう働きかける。 大規模災害に備え、鶴見区防災担当者との連携を今後も進め、地域を含めた防災活動を推進していく。 働き方改革プロジェクトで検討した結果を元に、職員でも共通理解を図り、短期的、長期的な視点で改革を進めていく。

